

# 英語学習への意識の変化に関わる要因

## —小学校時及び中学校時の英語の好き・嫌いとの関係—

及 川 賢 教育学部英語教育講座

キーワード：小学校、中学校、外国語活動、英語、好き・嫌い

### 1. はじめに

平成23（2011）年4月より全国の小学校で「外国語活動」が5・6年生の必修となった。「外国語活動」という名称ではあるが、学習指導要領にも「英語」が原則であることが明示されており、事実上、英語が小学校で必修となった。各地で学会や自治体が主催する研修会等が開かれ、実践力の向上や外国語活動そのものの必要性に関する議論が展開されている。さらに、マスコミも大きく取り上げるなど、社会的に見ても大きな関心事となっている。

一方で、始まって間もないにもかかわらず、すでに「教科化」の議論が始まっている。「外国語活動」は「教科」ではなく「領域」である。教科と領域の区別は文部科学省も具体的に示していないが、現行の「小学校学習指導要領」の外国語活動の目標に「外国語を通じて（中略）コミュニケーション能力の素地を養う」とあるように、その目標は英語力そのものを身につけることではない。外国語（英語）の授業なのに英語の習得が目的ではない、という目標はわかりにくい、その原因は小学校教諭で中学校または高等学校の英語の免許を取得している教員が4.7%と極めて少なく（文部科学省、2014）、英語そのものの習得を目標として謳うことができなかったと推測できる。しかし、小学校の外国語活動が英語そのものの習得を目指していないという点は英語教育関係者以外には十分に伝わっていないと思われる。そのため、小学校で英語が始まったのに日本人は英語ができるようになっていないという見方は日本社会に根強く、これを受けて、平成25(2013)年12月13日に文部科学省は「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を発表したが、その中で小学校は現在の外国語活動を3・4年生に学年を下げ、5・6年生は教科とすることが望ましいと提言している。この実施計画を受けて設置された「英語教育の在り方に関する有識者会議」も平成26（2014）年9月26日に発表した「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」の中で小学校の5・6年生で外国語を教科にすることを提言している。

このように、小学校の英語教育に関するこの10年あまりの動きは非常に大きい。問題点も数多く指摘されているが、小学校と中学校の接続・連携が不十分であるとの指摘も多い（上述の有識者会議）。小中連携において問題点としてよく挙げられるのが、「小学校では英語が好きだったのに中学校では英語の歌やゲームがなく、文法が中心で、嫌いになった生徒が多い」という指摘である。しかし、実際にそのような生徒が数多く存在しているのか、またその理由は本当に「文法中心」なのかは明らかになっていない。本調査では、中学生を対象にアンケートを実施することで、小学校から中学校へ生徒が移行する過程で起こる変化について調査する。

なお、小学校の科目は「外国語活動」であり「英語」ではないが、特に必要な場合を除いて、

便宜上本稿では「英語」と表記する。また小学校では「児童」、中学校では「生徒」と区別することが基本だが、本稿ではこの区別は重要ではないのですべて「生徒」と表記する。

## 2. 関連文献

小学生や中学生の英語の好き・嫌いに関する調査の中ではBenesse教育開発センター（2012）が地域性の広さや規模の大きさ、また新しさという点で、最も信頼がおける調査となっている。全国の公立中学校1年生とその母親2,688組にインターネット調査を実施し、学校英語の好き・嫌いについて、小学校6年生の時に英語が好きだったかどうかを4件法で尋ねたところ、「とてもそう思う」が16.6%で、「まあそう思う」が46.3%という回答を得た。これら2つを合わせると62.9%、すなわち約3分の2が肯定的な回答をしている。その理由（複数回答）として最も多いものが「授業が楽しかったから」（73.3%）で、続いて「もともと興味があったから」（30.2%）、「友だちと一緒に楽しかったから」（24.0%）、「先生が好きだったから」（22.5%）、「授業がわかりやすかったから」（20.6%）、「英語力を伸ばす役に立ったから」（4.8%）と続く。一方で英語が好きではなかった理由としては「もともと興味がなかったから」（56.0%）、「授業がつまらなかったから」（31.4%）、「授業が難しかったから」（21.4%）、「英語力を伸ばす役に立たなかったから」（13.7%）、「友だちと一緒に恥ずかしかったから」（10.7%）、「先生が嫌いだったから」（5.7%）が並ぶ。

一方、中学校での英語に関する質問では、学校の英語の好き・嫌いについて「とてもそう思う」が13.8%で「まあそう思う」は43.3%である。これらを合わせた57.1%が肯定的回答であるが、小学校の62.9%をやや下がるものの、大きく開いているとは言い難く、本稿の「はじめに」で指摘した「中学校で英語が嫌いになる」という生徒は社会一般での印象ほど多くはない。中学校での英語学習動機の上位は「英語のテストでいい点を取りたいから」（82.4%）、「英語をできるようになるのがうれしいから」（70.9%）、「英語はこれからの国際社会で必要となると思うから」（68.0%）、「できるだけ良い高校や大学に入りたいから」（66.6%）、「将来、日本で就職するときに役立つから」（57.9%）、「英語を勉強すると視野が広がるから」（57.6%）、「英語が好きだから」（51.6%）と続くが、上位には英語を学ぶことで利益を得られるという「道具的動機づけ」のほうが目立つ。

この調査は全国規模で多数の生徒及び保護者を対象としており、小・中学校の英語教育の現状を捉える上では信頼度の高い貴重な資料である。しかし、本調査の目的である小学校から中学校へ移行したことで英語に対する意識がどのように変化したのか、そしてその原因は何なのかという問題に直接答えるものではない。

これらに直接答えている調査に國友（2012）と井田（2015）がある。國友（2012）は複数の小学校から入学した生徒が通う公立中学校1年生の134名に小学校の外国語活動（＝英語）及び中学校の英語の好き・嫌いとその理由を尋ねた。まずアンケートで中学生を以下の4つのグループに分けた。

- A：小学校の「外国語活動」が好きだった・中学校の「英語」も好き
- B：小学校の「外国語活動」は好きだった・中学校の「英語」は嫌い
- C：小学校の「外国語活動」は嫌いだった・中学校の「英語」は好き
- D：小学校の「外国語活動」が嫌いだった・中学校の「英語」も嫌い

それぞれのグループの生徒に小学校で英語が好きあるいは嫌いだった理由を、また中学校での英語が好きあるいは嫌いである理由を尋ね、5件法で回答してもらった。

この中で最も割合が高かったのはAグループで、全体の61%に当たる。しかし、この調査の主な目的は、Bグループの生徒たち（「好き」→「嫌い」）の英語に対する気持ちに変化した理由を明らかにすることである（Bグループは全体の13%）。アンケートの結果、英語が嫌いになる理由は「新しい単語を覚えるのが難しい」「文章になるとわからない」「単語の読み方がわからない」「テストでよい点が取れない」など「能力」に関わる項目が好き・嫌いに影響を及ぼすことが多いこと、小学校の特徴とされる歌やゲームが中学校で少なくなったことが大きな原因ではないことが明らかになった。一方、小学校の「外国語活動」は嫌いだったが中学校の「英語」は好きだと答えたCグループ（全体の17%）でも、その理由は「文字を勉強できるようになったから」「新しい単語を覚えるのが楽しい」「自分の思いを表現できるから」など、こちらも能力に関わる項目が好き・嫌いに影響を及ぼすことが明らかになった。このように、小学校から中学校への移行における英語に対する印象の変化は否定的（「好き」→「嫌い」）の場合でも肯定的（「嫌い」→「好き」）のいずれの場合でも、「できる・できない」という能力に関する要因が影響を与えている可能性が高いことを指摘した。

井田（2015）は國友と同様の調査を行い、同様な結果を得ている。757名の公立中学校の1～3年生を対象にアンケート調査を実施した。小学校及び中学校での英語の「好き」「好きではない」に関する回答を基に生徒を國友同様に4つのグループに分類した。最も回答数が多かったのが小学校も中学校も英語が好きと回答したAグループで、全体の32%であった。次いで、小・中学校のどちらも好きではなかったというDグループが26%と続き、小学校は好きだったが中学校は好きではなかったと回答したBグループが22%、その逆のCグループが20%であった。

調査方法に関しては、國友の調査が好き嫌いの理由を事前に予想して項目を作成し、生徒はその項目に5件法で答える選択式を主としていたのに対し、井田は理由を記述式とし、アンケート回収後に回答を自身で定めた基準で分類するという方式を取った。調査の結果、小学校、中学校いずれも肯定的な回答のほとんどが「わかる、できる」「楽しい」「有用性を感じる、興味がある」「学外の体験がある」のいずれかに分類できた。否定的回答はこれらの逆で「わからない、できない」「楽しくない」「有用性を感じない、興味がない」のいずれかに分類できた。

「好き→好きではない」の理由としては「わからない、できない」が55.5%と最も多く、次いで「楽しくない」(29.5%)、「有用性を感じない・興味がない」(3.0%)と続く。ここでも、國友同様に「できる・できない」という能力が大きく関わっていることがわかる。「好きではない」が「好き」になったグループは「楽しい」(49.1%)が最も多く、「わかる、できる」が34.8%と続く。「わかる、できる」は2番目の要素ながら、3分の1以上を占めており、大きな要因である点は変わらない。

國友（2012）及び井田（2015）は生徒が英語を嫌いになる要因及び好きになる要因を直接調査した意欲的な論文である。しかし、質問項目を小学校と中学校で統一することで比較の質をより高めることが可能であろう。また、統計処理を施すことで、結果の信頼性をさらに高めることができる。本調査は國友や井田の研究をさらに発展させることを目的としている。

### 3. 研究

#### 3-1 目的

本調査の目的は小学校から中学校へ移行した生徒の英語に対する好き・嫌いがどの程度変化するのか、またその変化に関わる要因は何かをアンケートを通じて明らかにすることである。具体的には以下の2つのリサーチ・クエスチョン（RQ）に答えることである。

RQ-1：小学校時に英語が好きだったが中学校時に英語が嫌いになった生徒と小学校時に英語が嫌いだったが中学校時に英語が好きになった生徒の全生徒に占める割合はそれぞれ何パーセントか。

RQ-2：RQ-1で明らかになった2つのグループの生徒たちの変化に関わる要因は何か。

#### 3-2 参加者

本調査の参加者は埼玉県内の公立中学校3年生57名（男性：25名、女性：32名）。地域内唯一の中学校だが小学校は3つに分かれていた。小学校の外国語活動が必修となったのは彼らが小学校6年生だが、小学校5年生から外国語活動として週に1時間（学校行事等の場合は除く）英語に触れていた。中学校では学習指導要領に従い、1年生より週4時間英語の授業を受けていた。

#### 3-3 調査用アンケート

本調査では生徒の好き・嫌い及びそれに関わる要因を探るためにアンケートを作成し、実施した。小学校及び中学校の英語の好き・嫌いから生徒を4つのグループに分けるために、小学校5・6年次及び中学校1・2年次に英語をどのように捉えていたかを「好き」「どちらかと言えば好き」「どちらかと言えば嫌い」「嫌い」から1つずつ選んでもらった。分析においては「好き」と「どちらかと言えば好き」はいずれも英語を肯定的に捉えているとして、この2つの区別は問題としなかった。同様に「嫌い」と「どちらかと言えば嫌い」は両者とも英語を否定的に捉えているので、この2つの差は考慮に入れなかった。この結果をもとに参加者全体を以下の4つのグループに分け、本調査の分析の基本単位とした。このうち本調査の主な対象は第2グループ及び第3グループである。

第1グループ：小学校時に英語が「好き」で中学校時も英語が「好き」（好き→好き）

第2グループ：小学校時に英語が「好き」で中学校時は英語が「嫌い」（好き→嫌い）

第3グループ：小学校時に英語が「嫌い」で中学校時は英語が「好き」（嫌い→好き）

第4グループ：小学校時に英語が「嫌い」で中学校時も英語が「嫌い」（嫌い→嫌い）

第2グループ及び第3グループの英語に対する意識の変化に関わる要因を探るため、24項目のアンケートを作成した。

本アンケートの特徴は、同様の調査である國友（2012）が英語の好き・嫌いで分類したグループごとに異なる質問項目を用意していたのに対し、小学校と中学校について同じ質問項目を使い、比較を容易にしている点である。また、井田（2015）が記述式を中心にしていたのに対し、選択



式を主としている点で、回答のあいまいさを回避できるという利点がある。以下に例を示す。

【例】

02【英単語や英熟語を覚えることは得意でしたか？】

	得意だった	やや得意	どちらともいえない	やや苦手	苦手だった
小5～6：	5	4	3	2	1
中1～2：	5	4	3	2	1

もし、ある生徒が「小5～6」で「やや苦手」を選択し、「中1～2」で「やや得意」を選択すれば、小学校から中学校へ進む過程での変化を見取ることができる。

小学校を5・6年生としたのは、外国語活動として英語を学習した学年が5・6年生だからである。また中学校を1・2年生としたのは、小学校で2年間（5・6年生）を対象としているため、中学校での期間を同じにするためである。

アンケートでの質問項目数は以下の通りである。

○英語学習の得意・不得意に関する項目：11項目

「綴りと発音」「語彙」「発音」「文法」「聞く」「話す」「読む」「書く」「会話」「授業」「成績」

○英語学習の好き・嫌いに関する項目：5項目

「歌」「ゲーム」「英語」「授業」「教科書」

○英語の有用性に関する項目：2項目

「将来役立つ」「英語で仕事をする」

○英語や英語圏への興味：2項目

「英語圏そのもの」「英語圏への旅行等」

生徒はいずれも1～5の5段階のリカートスケールで回答する。「英語学習の得意・不得意に関する項目」が多いのは、國友（2012）や井田（2015）でこれらが英語の好き・嫌いを分ける大きな要因であることが明らかになっており、そのため、その中でもどの項目が好き・嫌いを分ける要因としてより重要なのかを明らかにするためである。また、塾や英会話教室など、学校以外での学習方法も回答してもらった。さらに、小学校や中学校でそれぞれ印象に残っていること、これから小学校で英語を学ぶ現4年生へのアドバイスなどの自由記述欄も3つ設けた。実際のアンケート項目については付録を参照。

### 3-4 手順

アンケートは2015年3月に実施校に配布・実施・回収を依頼した。回答に要した時間は15分程度である。統計的な分析には分散分析、対応のないt検定、対応のあるt検定を用いた。

## 4. 結果

### 4-1 英語の好き・嫌いの割合

小学校時及び中学校時の英語の好き・嫌いに関する回答をもとに参加者を4つのグループに分

けた。それぞれの人数及び割合は以下の通りである（表1、図1）。なお、無回答が1名いたため、パーセンテージの合計は100%にならない。

第1グループ：小学校は好きで中学校も好き：30人（52.6%）

第2グループ：小学校は好きで中学校は嫌い：5人（8.8%）

第3グループ：小学校は嫌いで中学校は好き：13人（22.8%）

第4グループ：小学校は嫌いで中学校も嫌い：8人（14.0%）

表1 小学校及び中学校の英語の好き・嫌いの人数

		中学校・英語	
		好き	嫌い
小学校・外国語活動	好き	30 (52.6)	5 (8.8)
	嫌い	13 (22.8)	8 (14.0)

\*無回答の1名は除く カッコ内はパーセンテージ

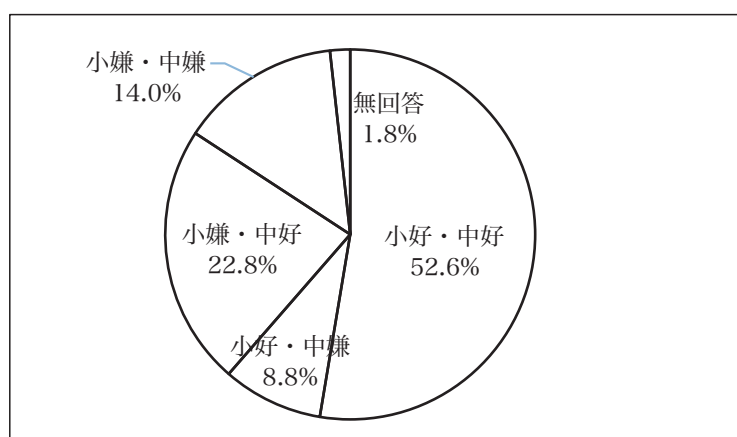


図1 小学校及び中学校時の英語の好き・嫌いの割合

回答者が最も多いグループは第1グループで、52.6%（30人）が小学校も中学校も英語が好きだったと回答している。一方でどちらも英語が嫌いだったと回答した生徒（第4グループ）は14.0%（8人）に留まっている。中学校で好き・嫌いが変化した生徒の割合は31.6%（18人）で、そのうち、小学校に好きで中学校に嫌いになったと回答した生徒は8.8%（5人）、小学校が嫌いで中学校が好きと回答した生徒は22.8%（13人）である。一般に言われている「中学で嫌いになる生徒」は確かに存在するものの、本調査においては、全体の中での割合は8.8%となっており、決して高くはない。むしろ、中学校になって英語が好きになったと回答している生徒のほうが多い（22.8%）という結果になっている。

また、第1～4グループを以下の形でまとめると、小学校・中学校の学校種別での好き・嫌いを算出することができる。

第1グループ+第2グループ＝小学校時に英語が好き

第3グループ+第4グループ＝小学校時に英語が嫌い

第1グループ+第3グループ＝中学校時に英語が好き  
 第2グループ+第4グループ＝中学校時に英語が嫌い

これらを表にすると以下の通りとなる（表2、表3）。

表2 小学校時の英語の好き・嫌い

好き	35人 (61.4%)
嫌い	21人 (36.8%)
無回答	1人 (1.8%)

表3 中学校時の英語の好き・嫌い

好き	43人 (75.4%)
嫌い	13人 (22.8%)
無回答	1人 (1.8%)

いずれも好きと回答している生徒のほうが多い。特に、中学校においては4分の3以上が英語を肯定的に捉えていることがわかる。

## 4-2 好き・嫌いの変化に関わる要因

本稿の目的は中学校に進んで英語の好き・嫌いが変化した生徒の割合とそれに関わる要因を明らかにすることである。そのため、分析の主たる対象は第2グループ（小学校は好きで中学校は嫌い：5人（8.8%））と第3グループ（小学校は嫌いで中学校は好き：13人（22.8%））の2つのグループとなる。

### (1) 英語が嫌いになった生徒に関わる要因

第2グループ（＝小学校の外国語活動が好きで中学校の英語が嫌い）が回答した各項目の数値を対象に、対応のあるt検定を用いて小学校と中学校の数値の間に有意差がある項目を探した。小学校と中学校の数値に有意な差が認められれば、それが英語を嫌いになった要因の候補として考えることができるからである（ただし、因果関係を証明するものではない）。

しかし、5件法で回答した20項目中で5%水準の有意差が確認できたものは「英語の授業で英語の歌を歌うことは好きでしたか？」の1項目のみであった（表4）。しかも、小学校よりも中学校のほうが数値が高くなったおり、これが「嫌い」に関わる要因とは考えにくい。

表4 小学校時に英語が好きで中学校時に英語が嫌いになった生徒が有意差を示した項目

	小学校	中学校
英語の授業で英語の歌を歌うことは好きでしたか？	3.60 (0.55)	4.40 (0.55)

下段は標準偏差 p=0.016\*

そこで、間接的なデータから関連する要因を探ることとした。小学校時に英語が「好き」と回答した生徒が35人（＝61.4%）存在するが、そのうち30人が中学校でも「好き」と回答し、5人が「嫌い」と回答している。この両者の中学校の回答を比較することで英語が嫌いになった要因への示唆を得ることが可能かもしれないと判断したためである。

5件法で回答する20項目を、対応のないt検定で検証したところ、13項目で有意差（5%水準）が確認された（表5）。

これらすべての項目を見ると、1～10の項目に「わかる」「得意」「簡単」という表現が目立つ。これらはすべて英語学習の得意・不得意に関する項目である。すべての項目の回答が5段階にな

表5 小学校時に英語が好きだった生徒の中学校時の回答で有意差が検出された項目

	中学校の英語が		有意確率
	好き (=第1グループ)	嫌い (=第2グループ)	
1. 単語の読み方がわかる	3.83 (0.91)	2.80 (0.84)	p=0.024*
2. 単語を覚えることは得意	3.53 (0.94)	2.20 (0.84)	p=0.005**
4. 文法は簡単	3.00 (0.98)	1.80 (0.45)	p=0.012*
6. 英語を話すことは得意	3.07 (1.11)	1.80 (0.84)	p=0.027*
7. 英語を読むことは得意	3.67 (1.03)	2.20 (0.84)	p=0.005**
8. 英語を書くことは得意	3.37 (1.13)	2.00 (0.71)	p=0.007**
9. 英語で会話をするのは得意	3.03 (0.81)	1.80 (0.84)	p=0.004**
10. 英語の授業は簡単だった	3.30 (0.84)	2.20 (0.84)	p=0.01*
15. 英語は好き	4.10 (0.80)	2.20 (0.45)	p=0.00**
16. 英語の授業は好き	4.00 (0.74)	2.60 (0.55)	p=0.00**
17. 英語を使った仕事に就きたい	3.60 (1.10)	1.80 (0.45)	p=0.00**
18. 英語圏に興味関心がある	3.93 (0.94)	2.20 (0.45)	p=0.00**
19. 英語圏に行きたい	3.53 (1.25)	1.60 (0.89)	p=0.002**

っているため、3より大きな数字が肯定的な回答で、3より小さな数字が否定的な回答と見る事が可能である。英語が好きにならなかった第1グループは数値がすべて3より大きく、嫌いになった第2グループは数値がすべて3未満となっている。このことから、両グループの間に単に差があるというだけではなく、英語が好きになった生徒は肯定的に捉えている項目が多く、嫌いになったグループは否定的な項目が多いという結果になっている。

このデータは英語が嫌いになったグループの変化の理由を直接示すわけではないが、中学生になって英語が嫌いになる、あるいは好きになる理由を間接的ながら示唆していると言えよう。この結果は、中学生になって英語が嫌いあるいは好きになった生徒の理由が、どちらの場合も英語ができる・できないに関わる項目が多いという國友（2012）や井田（2015）と同様の傾向を示している。

一方で、本稿の「はじめに」で述べた「中学校にはゲームや歌がないからつまらなくなる」という指摘は今回のアンケート結果からも読み取れない。必ずしも、歌やゲームなどの「楽しい」活動の有無が英語の好き・嫌いの原因ではないという可能性が指摘できる。

さらに、「中学校では英語のテストがありますが、テストやそれにより成績がつくことをどう思いますか?」という項目の有意確率が0.096で、有意傾向を示しているが、これも間接的ながら、英語が「できる・できない」という要素が関連していると思われる（表6）。

表6 テスト等で成績がつくことに対する回答

	中学校の英語が		有意確率
	好き (=第1グループ)	嫌い (=第2グループ)	
11. 成績がつくことがうれしい	3.33 (1.06)	2.40 (1.52)	p=0.096

もちろん、これらすべてのデータは因果関係を証明するものではない。しかし、過去の文献と同様の傾向を示しているという点から、英語の「できる・できない」という要因が中学校で英語が



嫌いになった可能性を示している。

一方、「好き」「関心がある」などの質問項目は因果関係の証明がより難しい。英語ができるから英語で仕事をしてみたい、英語圏に関心がある、ということになっている可能性は十分にあるが、逆方向を否定するものでもない。今後のさらなる調査が必要だろう。

## (2) 英語が好きになった生徒に関わる要因

本調査においては、一般的に指摘されている「小学校では英語が好きだったが中学校では英語が嫌いになった生徒」(＝第2グループ)よりもその逆のタイプの生徒(第3グループ)のほうが多かった。ここでは彼らの回答から関連する要因を探ることとする。対応のあるt検定を用いて、彼らの小学校と中学校の回答を比較したところ、下記の15項目で有意差が検出された(表7)。

表7 小学校時に英語が嫌いで中学校時に英語が好きになった生徒が有意差を示した項目

	小学校	中学校	有意確率
1. 単語の読み方がわかる	2.15 (0.69)	3.62 (0.87)	p=0.00**
2. 単語を覚えることは得意	2.08 (0.86)	3.46 (0.78)	p=0.00**
3. 発音は得意	2.23 (0.83)	3.15 (0.90)	p=0.002**
5. 英語を聞くことは得意	2.85 (1.12)	3.85 (0.69)	p=0.009**
6. 英語を話すことは得意	1.85 (0.99)	2.46 (0.88)	p=0.005**
8. 英語を書くことは得意	2.33 (1.00)	3.33 (0.71)	p=0.003**
9. 英語で会話をすることは得意	1.58 (0.79)	2.25 (0.62)	p=0.013*
12. 英語の歌は好き	3.54 (1.33)	4.69 (0.48)	p=0.005**
14. 英語は将来役立つ	4.08 (0.76)	4.62 (0.51)	p=0.028*
15. 英語は好き	2.38 (1.12)	3.54 (0.78)	p=0.002**
16. 英語の授業は好き	2.46 (1.13)	3.85 (0.56)	p=0.001**
17. 英語を使った仕事に就きたい	2.23 (0.60)	3.08 (1.19)	p=0.005**
18. 英語圏に興味関心がある	2.15 (0.90)	3.15 (1.07)	p=0.002**
19. 英語圏に行きたい	2.15 (1.07)	3.46 (1.05)	p=0.001**
20. 教科書がよかった	3.46 (0.67)	4.08 (0.64)	p=0.001**

ここでも、1～9で「わかる」「得意」「簡単」などの語彙が目立つ。これらはすべて「英語学習の得意・不得意に関する項目」である。また、それぞれの数値を見ると、「単語の読み方」「単語を覚えること」「発音」「聞くこと」「書くこと」で小学校が3未満なのに対し、中学校が3より大きな数値となっている。すなわち、否定的な印象が肯定的印象に変化したことがわかる。

英語が「できる・できない」の原因とは言えないが、関連が深い項目(12～20)でも数値の伸びが観察され、特に「英語は好き」「英語の授業は好き」「英語を使った仕事に就きたい」「英語圏に関心がある」「英語圏に行きたい」の各項目で否定的評価が肯定的評価に変化していることがわかる。その他の項目では、小学校時・中学校時の両者が肯定的評価(数値が「3」より大きい)の場合でも、否定的評価(数値が「3」より小さい)の場合でも、有意な伸びが確認されている。

(1)の分析と同様に、小学校時に英語が嫌いだった生徒(＝第3グループ+第4グループ)が中学校時に好き・嫌いが分かれた場合、何が変わっているのかを比較した。すなわち、第3グループと第4グループの中学校時の回答の比較である。このデータも間接的ながら英語が好きあ

るいは嫌いになった根拠を考える上で助けになると思われる。

しかし、両グループ間で有意差が現れた項目は「聞くことが得意」の1項目であった（表8）。

表8 小学校時に英語が嫌いだった生徒の中学校時の回答で有意差が検出された項目

	好き (=第3グループ)	嫌い (=第4グループ)	有意確率
5. 聞くことが得意	3.85 (0.67)	2.75 (0.89)	p=0.005**

有意差がほとんどなかった原因として、第4グループの生徒たちも第3グループ同様に多くの項目で数値が上昇した可能性がある。そこで、第4グループの生徒の各項目の小学校時と中学校時の回答を対応のあるt検定で比較したところ、「単語の読み方」「読むこと」「歌」「英語が役立つかどうか」「英語の授業が好き」「英語圏への興味」の6項目で数値の上昇が見られた（表9）。

表9 小学校も中学校も英語が嫌いだった生徒が有意差を示した項目

	小学校	中学校	有意確率
1. 単語の読み方がわかる	1.88 (0.84)	3.38 (0.52)	p=0.00**
7. 英語を読むことは得意	1.83 (0.75)	2.67 (1.03)	p=0.004**
12. 英語の歌は好き	3.12 (0.64)	4.25 (0.46)	p=0.002**
14. 英語は将来役立つ	3.75 (1.17)	4.50 (0.54)	p=0.048*
16. 英語の授業は好き	2.00 (0.93)	2.75 (0.71)	p=0.02*
18. 英語圏に興味関心がある	2.12 (1.13)	2.75 (1.23)	p=0.049*

この6項目を第3グループで有意差が生じた項目（＝表7）から除き、小・中学校時で有意差があった「聞くこと」を加えると、以下の10項目が残る。

「単語を覚えることが得意」「発音は得意」「聞くことは得意」「話すことは得意」「書くことは得意」「会話をするのは得意」「英語は好き」「英語を使った仕事に就きたい」「英語圏に旅行や留学をしたい」「教科書は良かった」

本稿ではこれら10項目を暫定的に英語が好きになった要因として捉えることとする。

なお、これ以外の項目（塾や英会話教室などの学校以外での学習方法、小学校や中学校でそれぞれ印象に残っていること、これから小学校で英語を学ぶ現4年生へのアドバイス等）には有意差やグループ間で目立った差が確認されなかったため、本稿では省略する。

## 5. 考察

本稿は小学校から中学校に移行する中で英語が好きあるいは嫌いになった生徒の割合とその変化に関わる要因を調査することであった。具体的には以下の2つのリサーチ・クエスチョンを設定した。

RQ-1：小学校時に英語が好きだったが中学校時に英語が嫌いになった生徒と小学校時に英語が嫌いだったが中学校時に英語が好きになった生徒の全生徒に占める割合はそれぞれ何パーセントか。

RQ-2：RQ-1で明らかになった2つのグループの生徒たちの変化に関わる要因は何か。

RQ-1に関しては、中学3年生を対象にしたアンケートの結果、小学校時に英語が好きで中学校時に嫌いになった生徒は全体の8.8%で、一般に認識されているほど多くはなかった。一方で、小学校時に英語が嫌いでも中学校時に英語が好きになった生徒の割合（22.8%）のほうが高かった。

RQ-2に関しては、データが直接・間接的なものとなっており、やや解釈が難しくなっている。まず、小学校時に英語が好きだったが中学生時に嫌いになった生徒のアンケート結果を小学校時の数値と中学校時の数値を統計的に比較してみたところ、歌の得意・不得意以外に有意差は現れなかった。そこで、間接的なデータではあるが、小学校時に英語が好きだった生徒のうち、中学生になって英語が好きなままであった生徒と嫌いになった生徒のアンケート結果を統計的に比較してみたところ、以下の13項目において、英語が好きなままだった生徒のほうが、値が有意に高かった。

「単語の読み方がわかる」「単語を覚えることは得意」「文法は簡単」「英語を話すことは得意」「英語を読むことは得意」「英語を書くことは得意」「英語で会話をするのは得意」「英語の授業は簡単だった」「英語は好き」「英語の授業は好き」「英語を使った仕事に就きたい」「英語圏に興味関心がある」「英語圏に行きたい」

これらの項目が、一部の生徒たちが中学校時に英語が嫌いになった要因である可能性がある。本稿ではこれら13項目を暫定的に「英語が嫌いになった要因」と捉えることとする。

一方で、小学校時に英語が嫌いでも中学校時に英語が好きになった生徒の小学校時と中学校時の数値の比較において以下の15項目で有意差が確認された。これらを彼らが英語を好きになった理由の候補として捉えることができる。

「単語の読み方がわかる」「単語を覚えることは得意」「発音は得意」「英語を聞くことは得意」「英語を話すことは得意」「英語を書くことは得意」「英語で会話をするのは得意」「英語の歌は好き」「英語は将来役立つ」「英語は好き」「英語の授業は好き」「英語を使った仕事に就きたい」「英語圏に興味関心がある」「英語圏に行きたい」「教科書が良かった」

一方で、彼らの中学校時の数値と小学校時に英語が嫌いでも中学校時も英語が嫌いだった生徒（第4グループ）の中学校時の数値を比較してみたところ、有意差が現れた項目は「聞くことが得意」の1項目のみであった。そこで、第4グループの生徒の小学校時と中学校時の数値を比較したところ、以下の6項目で有意な上昇が見られた。

「単語の読み方がわかる」「英語を読むことは得意」「英語の歌は好き」「英語は将来役立つ」「英語の授業は好き」「英語圏に興味関心がある」

この6項目と上記15項目では5項目が重なっているので、それらを除く以下の10項目を本稿では暫定的に「英語が好きになった要因の候補」と捉えることとする。

「単語を覚えることは得意」「発音は得意」「英語を聞くことは得意」「英語を話すことは得意」「英語を書くことは得意」「英語で会話をするには得意」「英語は好き」「英語を使った仕事に就きたい」「英語圏に行きたい」「教科書が良かった」

暫定的ながら、アンケートを通じて、英語の好き・嫌いに関わる要因を抽出したが、これらの共通する要因は以下の7項目である。

「単語を覚えることは得意」「英語を話すことは得意」「英語を書くことは得意」「英語で会話をするには得意」「英語は好き」「英語を使った仕事に就きたい」「英語圏に行きたい」

このうち、「英語学習の得意・不得意に関する項目」は以下の4項目である。

「単語を覚えることは得意」「英語を話すことは得意」「英語を書くことは得意」「英語で会話をするには得意」

よって、本稿では英語の好き・嫌いに関わる要因として特に「語彙力」と「発表力」を指摘したい。繰り返しになるが、今回の調査で因果関係を証明することはできないが、その可能性を指摘することは十分可能であろう。中学校1年生の入門期においては特にこれらに力を入れて指導に当たることが生徒の英語嫌いを減少させることにつながる可能性があるだろう。また、「英語は好き」「英語を使った仕事に就きたい」「英語圏に行きたい」も因果関係の証明には至らないが、大きく関連する要因である可能性は指摘できるので、英語の指導において、これらを意識することも重要であろう。

## 6. おわりに

本稿は小学校から中学校に移行する過程で英語が好きまたは嫌いになる要因の抽出を試み、暫定的ながら「単語を覚えることは得意」「英語を話すことは得意」「英語を書くことは得意」「英語で会話をするには得意」「英語は好き」「英語を使った仕事に就きたい」「英語圏に行きたい」という要因が大きく関わっている可能性があることを指摘できた。特に、英語の能力に関わるはじめの4項目は「語彙力」と「発表力」にまとめることがで、この2つが英語の好き・嫌いを分ける要因である可能性がある。

本調査の問題点としては、参加者が少ないという点が指摘できる。本調査はアンケート項目において小学校時及び中学校時を共通の枠組みとし、統計的な処理を施したという点でこれまでの調査より新しくなっているが、さらなる改良が必要であるという点で、今後へ向けての予備調査的な位置づけである。今後は参加者をさらに増やして結果の信頼性を高めてゆきたい。また、アンケート結果は英語の好き・嫌いに関わる要因を指摘することはできるものの、因果関係を証明するには至らない。特に、第1グループと第2グループの比較、さらに第3グループと第4グループの比較はそれぞれの理由としては間接的と言わざるを得ない。実験的手法も視野に入れながら、調査をさらに進めてゆきたい。



## 参考文献

- 井田真由美 (2015)『コミュニケーション能力の素地を養う外国語活動の研究 ～小中連携の視点から、これからの教員研修のあり方を考える～』(平成26年度埼玉県長期研修教員研究報告書)
- 國友達朗 (2012)「小学校『外国語活動』・中学校『英語』嫌いの原因を探る」(埼玉大学教育学部提出の卒業論文)
- 文部科学省 (2014)「平成25年度公立小学校における英語教育実施状況調査の結果について」  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2014/09/03/1351570\\_04.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2014/09/03/1351570_04.pdf) (2015年3月31日現在)
- Benesse教育開発センター (2011)「第2回小学校英語に関する基本調査(教員調査)2010 ダイジェスト」  
株式会社ベネッセコーポレーション  
<http://berd.benesse.jp/global/research/detail1.php?id=3179> (2015年3月31日現在)
- Benesse教育開発センター (2012)「小・中学校の英語教育に関する調査～中学1年生の目から見た英語教育とは?～速報版」株式会社ベネッセコーポレーション  
<http://berd.benesse.jp/global/research/detail1.php?id=3178> (2015年3月31日現在)

(2015年3月31日提出)

(2015年6月12日受理)

## 付録 (アンケート用質問項目)

- 01 はじめて見る英単語の読み方がすぐにわかりましたか?
- 02 英単語や英熟語を覚えることは得意でしたか?
- 03 英語を発音することは得意でしたか?
- 04 英語の文法は簡単でしたか?
- 05 英語を聞くことは得意でしたか?
- 06 英語を話すことは得意でしたか?
- 07 英語を読むことは得意でしたか?  
→小学校で英語の文章を読んだことがなければ「中1～2」のみ記入。
- 08 英語を書くことは得意でしたか?  
→小学校で英語の文を書いたことがなければ、「中1～2」のみ記入。
- 09 先生や友達と英語で会話することは得意でしたか?
- 10 授業の内容は簡単でしたか?
- 11 中学校では英語のテストがありますが、テストやそれにより成績がつくことをどう思いますか?
- 12 英語の授業で英語の歌を歌うことは好きでしたか?
- 13 英語の授業でゲームやコミュニケーション活動することは好きでしたか?
- 14 英語を学ぶと将来の自分に役立つと思っていましたか?
- 15 英語は好きでしたか?
- 16 英語の授業は好きでしたか?

- 17 将来英語を使って仕事をしたいと思っていましたか？
- 18 アメリカ、オーストラリア、イギリスなどの英語圏に興味関心がありましたか？
- 19 将来英語を使える国（アメリカ、オーストラリア、インドなど）に旅行や留学をしたいと思っていましたか？
- 20 小学校、中学校で使った英語の教科書をどう思いますか
- 21 学校以外で英語を学んでいましたか？あてはまるものすべてにマルをつけてください。  
小学校のとき： 英会話教室 テレビ・ラジオの英語番組 学習塾（英語以外の教科がある塾も含む）通信教育（英語） 家庭教師（英語） その他  
中学校のとき： 英会話教室 テレビ・ラジオの英語番組 学習塾（英語以外の教科がある塾も含む）通信教育（英語） 家庭教師（英語） その他
- 22 小学校や中学校の英語の授業・学習で印象に残っていることがあれば書いてください（例：ゲーム、ALTとの活動、歌、単語の勉強、発音の練習）。それぞれいくつでも構いません。
- 23 これから小学校で英語を学ぶ4年生（4月から5年生）にアドバイスをするとしたら、どんなことをアドバイスしますか？下の空欄に書いてください。
- 24 その他、小学校・中学校の英語の授業について思うことがありましたら、自由に書いてください。